

にこにこ きらきら ゆめにむかって



# おともがわ

学校報 No.3

保護者版

平成 30 年 4 月 17 日

みんなで育む豊かな心・健やかな体・確かな学力

## これから求められる学力とは

今日、6年生の全国学力・学習状況調査が行われました。例年であれば、国語と算数の二教科で行われるのですが、今年は理科を含めた三教科での実施でした。

これまでの調査では、全体的に《主として「知識」に関する問題（A）》の基礎的・基本的な問題はよく、《主として「活用」に関する問題（B）》がやや悪いという傾向がありました。もちろん本校の子どもたちも例外ではありません。「H29UCHI レポ」でも報告したとおり、自分の考えを分かりやすく記述する問題に弱さが見られます。全国的にどこの学校でもこの特徴が見られるということは、日本の授業の特徴でもある知識伝達型授業からなかなか抜け出せないでいるということが言えるのではないのでしょうか。私たちが受けてきた教育は、知識伝達型授業が殆どでしたし、入試でも知識の量が問われていました。私たち教師自身がそのような教育を受けてきたのですから、そこからなかなか抜け出せないというの分かるような気がします。

しかし、これからの高度情報化社会を考えると、どうもそれでは通用しないのです。過去の10年間、20年間以上に、これからの10年、20年は変化が早いでしょう。それはAIの進歩を見ても、容易に想像がつかます。学者は、次のようなことを言っています。

2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう。  
キャシー・デビッドソン氏（ニューヨーク市立大学教授）の予測

今後10～20年程度で、アメリカの総雇用者の約47%の仕事が自動化されるリスクが高い。  
マイケル・A・オズボーン氏（オックスフォード大学准教授）

2030年度までには、週15時間程度働けば済むようになる。  
ジョン・メイナード・ケインズ氏（経済学者）

これは、日本にも言えることでしょう。21世紀社会では、「分かっていること」はネットで探せば大抵どこかに出てきます。だから、既に分かっていることについてはある程度よくて、むしろそれを使って新しい問題を解くことの方が求められます。答えが決まっている仕事は、コンピュータやロボットが人間以上に早く正確にやってくれます。しかし、AIが「解なし」と答える問いに対して、一人一人が自分の考えを出し合い、他と協調しながら「最適解・納得解」を導き出していくのは人間にしかできないことです。そのような力こそが、これから求められる力です。

これまでは、『三角形の面積=底辺×高さ÷2』を覚え、正確に計算する力が求められていましたが、これからは『なぜ三角形の面積=底辺×高さ÷2なのか』について自分なりの考えをもち、それを言葉にしながらかえて話し合い、一人一人が自分で答えを作り出す力が求められています。

小学校で2020年度、中学校では2021年度、高校では2022年度から新学習指導要領がスタートします。そのため、高校で子どもたちが3年間新学習指導要領で学んだ2024年度から、つまり今の小学校6年生の子どもたちが高校3年になる時から、大学入試も本格的に変わっていくのではないかと予想されます。その前に2023年度から、今の小学校4年生が中3になる時には、高校入試もこれまでと大きく変わるのではないかと考えています。ここで触れたタイミングは確定のものではありませんが、「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」が求められる方向性は変わらないでしょう。つまり、待ったなしの状況であることに違いないのです。